

サガは一人だった。アオという少女とつるんでいたこ

ろはナサケというひどく優しい男だった気がするし、スメラギという男と悪さをしていた時はコウというギャングスターだった気がする。大した違いはないのでいちいち覚えてなぞいなかった。いつまでも変わらず若々しい容姿と反対に、名前はコロコロ変わった。その時そのとき付きあっていた奴を取って食うたび違う名前になるのだ。腕いだ自分の頭とそいつの胴体を繋ぎ合わせて、そうして何十年も生きてきた。何百年だったかもしれない。それすらよく覚えていなかった。細い首も太い首も真水平に削ぐのが得意だった。気が遠くなるほど長く生きているサガの頭部は、膨大な量のエネルギーによってその形を保っている。そのため首から下はすぐに枯れ果てる。若さが、様々な人間の若さが老いゆく彼を彼たらしめる世に繋ぎとめていた。皆が皆驚愕を顔に浮かべて首だけになるのだから、これはおそらく彼にのみ与えられた超能力だった。

「デメエの持つてきやいいじゃんかよオ。クソジジイ」
熱帯夜、とある都会の真つ暗な路地裏。行き止まりで尻餅をつくサガの真隣にはがっしりとした男の首から下が落ちていた。肌は変に土気色でシワシワしていた。目の前で仁王立ちする影に向かってペッと血液交じりの唾を吐く。

「駄目だ。我々はその女の臓器に用がある」
初老ほどらしい男の冷酷な声が降りかかる。いくらか白髪の混じった髪を後ろに撫でつけている。この暑さでスーツ。しかもジャケツトまで。目にするだけで暑苦しい格好に内心ゲエツと苦い顔をしたサガの、もう真隣には若い女の首が同じく真水平な断面から真つ赤を反射させ光っていた。それを目の端で捉えるとコキコキ首を回

し、

「いやア？こいつア男だったみたいだぜ？」

むんずと男の胴と女の首を掴むと切断面をくっつけてみせる。と、するすると皮膚は接着し合い綺麗に繋がった。

「ほらな」

人の悪い笑みと共に、どさり。女の顔からは想像できない重さの音があたりに響いた。初老の男が一瞬息を呑んだ。ピリピリ。静電気のような緊張感が一瞬であたりを支配する。

「……それでも返して貰う。これはその女と我々の契約だ」

深いため息とともに男は左手の爪と爪を擦り合わせてパチパチやった。どうやらそれがクセラしかった。

「契約だア？」

「ああ。書面上のやり取りもある確固とした契約だ」

「契約ねえ」

「早くしろ。時間がない」

パチパチ。パチパチ。爪の音とともに、不可視の火花が二人の視線を染め上げる。呆れた、と言わんばかりにサガは大きいため息をつく。いきなり大きな口を開けて笑い始めた。

「俺はなあ。今さつきサガになった。この女——セイが教えてくれた世界はたくさんあるがなあ。おいジジイ。この世で何より固い契約の名前を教えてやろうか？絶対的に破られることのない魂と魂の契約の名前はなあ、それは情だよ。愛だよ。つまり、」

仁王立ちする男の足と足の間に膝を滑らせ上方向に渾身の蹴り。グウツと唸りしゃがみ込む白髪交じりの頭を一瞥すると全速力で傍らを駆け抜けた。

「俺アこの体で女限ライブ行くんだよ！！！」

サガは地下ドルオタクだった。

じゃあなっ！　そう言い残し突風のように去ってゆく背中を霞む視界でなすすべもなく捉えながら、男は苦々しい顔をした。

「コイツだけはうまくいかないものだな…」

果てしなく紺色の空にはいくつか星が散っている。夏の夜の熱気を肌で感じながらあたりを見渡すと、死んだばかりの女の淀んだ瞳と目が合った。

「お前の名はサガではなく、この女はセキだというのに」熱をはらんだ風が男の頬を撫ぜる。流石にこの格好は暑いな。そう思った拍子にジャケツトが捲かれて、裏生地にはセイと二文字刺繍があった。

「もうちよいだったのになア〜…」

ライブハウスの喧騒を背にサガは蹲る。女の身体になろうと、世間はサガを男とみなすようだった。いったい何がいけなかったのだろうか？　男物の服？　低い声？　短い髪？　ぐるぐる考えて思い至った。そうだ。顔を覚えられているんだった。

高度管理社会。この社会がそう呼ばれ始めて幾星霜。

もはや行き詰まった状況の中成立した新政権は、世紀末に訪れるであろう暴動を予め防止するため国民から娯楽を奪った。漫画、ゲームなど以前から物議を醸していた文化は淘汰され、政府に協力的なメインカルチャーだけが残った、ように見えた。営みがそう簡単に消滅するはずもなく、多種多様なそれらは今も非合法的に嗜まれて

いる。サガもアイドルという非合法を愛する者の一人だった。セイに教えられたものだったがいつしか彼女以上にのめりこむようになっていた。宝物は宝箱の中で、ネオンに隠れて光っている。これといった信念も持たずふらふらと生きてきたサガが見つけた真理の一つだった。

ることのできない至上の白昼夢だった。相席なんてぜってえやだ。そう思いつつ気づけばサガは首を縦に振っていた。店員の疲れ切った笑顔を見てからあれっと思う。そういうセイは相席なんてへっちゃらなヤツだったなあ。ふと手の甲を見ると、付け根に小さなホクロ。少し前までセイにあつてサガにはなかったものだ。そつと撫せて自分とセイが少しづつ混ざり合っている奇妙さを実感した。

「ハア〜。ファミレスでも行くかア」
掛け声とともに立ち上がると、ジーンズのポケットに両手を突っ込み夜の街を大腿で歩き始める。そういえばこのところロクな物を食べていない気がした。セイを殺してしまった手前、寄る辺がなくなってしまったからだ。安アパートからセイの貯蓄を漁り、コンビニで買ったインスタント麺を嚼る生活を送っている。そうして何となく生きている。否、生かされている。生きるのももういいなアと思うたび不思議な力が働いて、気づいたころには新たな肉体が首から下に繋がっているのだ。どうしたって逃げられない奇妙な運命を前に、サガの心はもはや揺らぎもしなくなっていた。生かされているらしいから生きる。それだけだった。それだけだったのだ。この前までは。そこにセイが現れてアイドルを教えてくれた。煌びやかな衣装を身にまとい、少女たちはまだない先輩の歌を、まだない春の歌を、とこしえの少女性を歌った。

「むぐう」
女がふと顔を上げた。その顔に強烈な既視感があった。何度だつて惹かれ直した、熱を持つ偶像。意識より先に言葉が出ていた。
「も、もしかして、ヒカリ？」
「えっ？　■■■さん？」
どうやら正解だったようだ。鈴の音のように麗かかわいらしい声に、ああそんな名前だったかもなああとぼんやり記憶が呼び起された。

「ヒカリは今頃何歌ってんだろなあ…」

「ラ、ライブは？」

「その、体調不良で今日は休みに…」

「ああ…まだ悪いの？」

「いい、おかげさまで…」

「そりゃア良かった…」

「そんな彼女がパフォーマンスで幻出させる「ヒカリ」という完璧な偶像が好きだった。それは今こうして、安っぽいファミレスで相席をお願いされている時には到底見

サガは内心正気じゃなかった。この世でいちばんのアイ

ドルが目の前で食事を摂っている。夢見心地半分、信じられなさ半分という感じだった。どうにか平生を保とうと必死に努めたがメニューを開く手が震えている。当のヒカリはというと、もぐもぐもぐ、ごくくん。忙しく物を咀嚼しては嚥下すると、恥じらうように口元を押しさえた。しばらくサガをじつと見つめていたが、やがて決心したように口を開く。

「あの！ ■■さん」

「ハイ?!」

「私、本当はヒカリじゃなくってユルガセって言います。」

※◎■ ■■年* * *月生まれの 絵画座、実家は内地干潟の方で今は頓服浴地の方に…」

「才、オイ?! 何言ってるんだよ?!」

「聞きましたね?!」

「聞かされたなア?!」

「ファ、ファンに個人情報喋っちゃったし、つ、繋がっちゃったし、こ、これってマズいですよね?! 仕事やめさせられますよね?!」

「ま、ア…?!」

一体どういうことだ? 頭が真っ白だ。何が何だか分からないままサガは必死で相槌を打った。目の前の少女は至って真剣な瞳のまま話を続ける。

「そうですね?! わッ、私、やめたくって…:その、アイドル…:」

随分と尻すばみな声だった。それでもサガを愕然とさせるには十分な言葉だった。

「どうしたってそんなこと言うんだよ…:」

ヘナリとその場に臥せってしまったサガを、ユルガセは困ったように見遣った。

「アイドルをやっていると感じるんです。私がぐちゃぐ

ちゃになつてくのを…。だから、です」

不安そうに、それでもしつかりとユルガセは答えた。サガはその声色から決して揺るがぬ意思を受け取った。

「そうか…:そうかよ…:」

どうにもならないことはどうにもならない。サガはそれを経験則で知っていた。だからこそ悔しかった。

「だから、あの…:仕事辞められるように手伝ってください!」

推しに頼まれたことを断れるはずもなかった。ハイ。気づいたらそう答えていた。快諾してから驚いた。何だっ

て? 手伝う? ああ、あれも全てセイのお人好しのせいだ。相好を崩す理想の少女を前にサガはほんやりそう思った。全てに理解が追いつかずふらふらする。

「とりあえずなんか食わせてくれ…:」

思考をやめた頭の代わりに腹がぐるぐる救難信号を出した。

この生活も案外いいかもしれない。午後二時、のどかな青空を眺めつつサガは思った。ユルガセのアパートに転がり込んで三日目。クーラーの効いた部屋で寝転がりつつアイス片手に見物する酷暑はいっそ心地よい。

「夢みたいだなア…:」

「どうかしました?」

「イヤ、何でもねえ」

キツチンから声が飛んできて反射的にそう答えてしまった。実際は何でもないわけがないのだ。あのヒカリの、いやヒカリなんて本当はいなくて本名はユルガセラしいが…:、ともかく焦がれ続けたアイドルの部屋に幸か

不幸か転がり込めたのだ。ずっとそうして生きてきたから、サガは人の厄介になることに関しては誰よりも得意だった。しかしこれは想定外だ。想定外中の想定外だ。

平常心なんて保てるわけがなかった。ソファに置かれた桃色のうさぎと目が合う。この部屋はピンク色にごちゃ

ごちゃしている。心なしか甘い香りまでする。セイの部屋は白くって物が無くってキレイな匂いがして、俺はそ

れが好きだった気がするけどよオ、これも…。邪な思いが浮かんでしまう自分が嫌で、残りのアイスを目一杯口に放り込んで寝たふりをした。頭がキインと射貫かれた。

夏だ。顔を曇めながら今更そう感じた。

「夜ごはんの買い出しに行くけどサガは何か要る?」

スイカでも。そう答えたいのをグツと我慢して聞こえないふりをした。

聞き覚えのある歌声の、聞き覚えのない曲調で目が覚めた。

「…:知らねえ曲…:」

ふと横を見ると、背筋を伸ばしてユルガセが何かを口ずさんでいた。辺りはすっかり暗くなっている。もう夜らしい。窓からぬるい風が吹き込んできた。サガが起きた

ことにも気づかずユルガセは楽しそうに歌っている。ヒカリは完璧な角度で微笑むけど、こっちは随分柔らく笑うんだな…:。風に靡いた髪がきらきら光った。それを

目にした途端、ユルガセがヒカリではないことに急に興味を湧いた。

「わ。起こしちゃいました?」

「イヤ。それよりさア、それ何の曲?」

「えっ? これ? これは…:なんでもないです」

「そう…:」

何か触れてはいけないものだったのだろう。煮え切らない答えと共にそっぽを向いてしまったユルガセにサガはそれ以上追及しなかった。少しの反省とともに、代わりに別のことを尋ねた。

「じゃあさア。ユルガセってどうやって書くのか教えてくれよ」

「私の名前？ それはね、こう書くの」

ユルガセはサガの方を振り向くと、カーペットに指で「忍せ」と書いてみせた。

「分かりました？これでユルガセです」

「へえ。いいなア。俺の名前の書き方も知りたい？ どれがいい？」

「サガは一字でしよう」

くつくつ笑うユルガセを見て、サガは少し寂しそうな顔をした。それを知ってか知らずか栗色の瞳はじつとサガを見つめる。何だよ、と言いたげな視線とがち合つて数秒後、ほうつと息を吐いた。

「アイドルって借り物なんです。私の皮を使って私じゃないあたしが借り物の歌を歌ってかわいらしいステップと完璧な角度で微笑むの。私は誰かの歌なんて歌いたくないんです。私の格好で私の歌が歌いたい。だって私は自由だから。さっきのは私が作った曲なんです。でもあんな不格好な曲、ヒカリは絶対に歌わない。だからぐちゃぐちゃになっていくの」

難しいですね。柔らかない身がくったりと覆いかぶさった。桜貝のように淡く形のいい五つの爪が光を帯びてサガのシャツの中にすりと消える。

「だからね。私、アイドルなんてやめたいの……」

うるんだ瞳にサガができるのは、ただ見つめ返すことだけだった。何も言わないんですね。ユルガセはそう言っ

てサガの脇腹を撫ぜた。久々の人肌だ。ああもうこのまま何もかもどうでも良くなればいいのに。ある日突然出てきてしまった家のことを思い出した。まだまだ足りない。こうして時々自分の中のいい子を否定しないとい子に分からなかった。通り魔みたいに突発的に悪い子になりたかった。ヒカリは完璧だからこそ余計自分がぐちゃぐちゃになっていく感触があった。もう嫌だった。沈む思いと裏腹に、手は上方向に。と、覚えのある柔らかな感触に行き当たった。ハツとして思わずサガを見る。

「バレた？実は俺もぐちゃぐちゃなんだよなア」

首から下は違う女のなの。俺。顔からは想像もできないほど細い腕で同じくらいの細さの色白な腕を掴んだ。腫物を扱うみたいにそうつと持ち上げると自身の腹の上に優しく置いた。

「俺もうしばらく野郎としかやれねえの。絶望だよなア。でもさ。この体になってまずヒカリに会いに行きたかった。そんだけ好きだった。キレイだと思った。顔覚えられちまつて入れなかつたからあの日ファミレスにいたんだけどよオ。それでさ。彼女を作ったのは紛れもなくユルガセ、あんただ。だからよオ、あんたの苦悩も葛藤もあんたが光らせてるんだよ」

顔を上げると、少女は泣いていた。悲しそうで嬉しそうな極上の笑みを湛えていた。男はそれにドキリとした。

「私……あたし、またヒカリになっていいかな」

「こんな俺が言うのも何ただけどよオ、人間を人間たらしめるのは非合理性だと思うぜ」

「明日のライブ、来てくださいね」

「勿論。でも今はユルガセの歌を聞かせてくれよ」

「へたくそでもちゃんと聞いてくれる？」

「ああ」

ユルガセは目許を指でそつと撫ぜるとニツと微笑み歌い始めた。ヒカリとは違うつたなくて不安そうなの、それでいて伸びのある歌声だった。それを聞きつつサガはもう一度目を閉じる。目蓋に張り付いた彼女の笑い顔を思い出しながら、ああこれが恋ってことかアとしみじみ思ってた。

ライブハウスはいつも通り少々汚く、安っぽく、サービスは行き届いていないし、つまりはあまりいい場所ではなかった。でもそこがいいんだよなア。コントラストは強い方がいいのだ。客入りは程々。中肉中背の男たちと身綺麗で小さな女たちの雑音に紛れて、どちらでもないサガはさつさとドリンクを交換して開演を待っていた。音楽が消え、刹那。鼓膜が割れそうになるほどのピージーエムが流れ出す。また。何度体験してもこの瞬間ばかりはたまらない。夢現の始まりをグツと身構え迎え入れた。

ヒカリはそこにいた。完璧な調子で完璧に歌を歌い、踊り、理想の少女を演じてみせた。最高だア、ヒカリ！！！！叫ばずにはいられなかった。このまま死ねたら！そう願った刹那、腹に激痛が走りぐらりと天地が逆さになる。次に聞こえてきたのは隣の女の耳をつんざくような悲鳴だった。

「なん……だア……？」

頭がぐらぐらする。冷汗が噴き出す。内臓全部が強く掴まれたみたいに捻じれて痛い。曲が止まったライブハウス。サガにはこの一瞬が永遠のように感じられた。

「だから言つたらう。女の身体を返せとな」

刹那後方から声がした。誰だ。サガは目だけを必死に動かした。先日の初老の男だった。

「サガ。いや、セキ。お前はもうすぐ死ぬ」

何だつて？セキ？男が掲げる身分証らしきものを凝視する。どうやら政府のお偉らしい。身分証にあるシンボルに見覚えがあるのだ。ヤツベ！人々が口々にそう叫び入口に突進していく。

「この女はー、お前の首から下はセキという。昔我々と手を組んでいた。共にお前を殺す算段を立てていた。しかし逃げ出そうとしたから時限式の毒を投与したのだ」男はだんだん弱るサガの眼前にズイと身分証を突きつけると、白い歯を覗かせて不敵に笑った。

「そしてなあ、セキ。私こそセイなのだよ」

頭が真つ白になった。夢でも見ているのかもしれない。

「どうしたって、そんなこと……」

やつとその一言だけを、掠れた声で絞り出した。理解が追いつかないことばかりで眩暈がする。そんなサガを横目に男は話し始めた。

「政府は娯楽を奪おうとしている、と専らの噂らしいが。

我々が本当に娯楽を奪おうと思うか？ 教えて

やろうセキ。我々は人から感情を奪おうと考えている。

お前は人の頭部以外を奪って生きているのだつたな。

お前のような特異——、いや、異常な奴らはお前のほかにぎつと二百名程度いる。そいつらが死ぬとどうい

うわけか水が枯れたり火が起きなくなったりするんだ。

これがどういふことか分かるか？ セキ。お前さえ死

ねば情動は消滅するのだ。好き嫌いや娯楽がなくなっ

たら人はどうなると思う？ 普通は鬱憤がたまり暴動

が起きるだろう。だがお前が死ねばそれは違う。生ま

れるのは究極の生産性だ。合理性だ。国家運営もさぞ

かし上手くいくことだろうよ。喜怒哀楽が我々の邪魔

をするんだ。セキ。お前はきつと自然発生的にそこにいたんだろう。それでもお前が生まれてこなければどうにかなかったことが多すぎる。お前は生まれてはいけなかつたんだ」

サガの頭はパンク寸前だった。体もどんと言うことを聞かなくなる。血が沸騰しそうに熱い。なのに死ぬんだとか、セキだとか。心が折れそう。助けてくれ。誰か。

サガ、さん。ふとステージから声がした。必死の思いで身を起こすとヒカリが立っていた。心配そうにこちらを見ていた。そうだ。彼女がいる。それだけでサガは何だつて出来てしまう気がした。必死に掠れた声を出して男を——、セイを煽ってみせる。

「そんなのジジイに言われたつてちつとも響かないね。ユルガセと過して、ヒカリのライブを見て分かつたんだけどさア。やっぱりよオ、人生が楽しくないと生きてる価値、ないんだぜ」

「残念だ。あの時素直に身体を渡して私を殺していれば、万事上手くいったのになあ」

「若いヤツしか代わりにならねえからなア。あんたじゃ無理な話だ。だからユルガセ。次はお前になるはずだ。でもなア、そんなことさせねえよ。だからジジイ！ 早く俺を殺せ」

「サガ！」

近くて遠いステージの上、少女は泣きそうな顔をして立っている。

「俺はもう生きるとかどうでも良くなつてたんだ。ヒカリを教えてもらうまでは。ユルガセを知るまでは。ヒカリ、と、ユルガセ……俺アあんたと運命だった気が、するんだ……」

「じゃあ運命なんかじゃなくなった頃に……きつと会いましょう」

「そんな時は俺の墓の前で……、お前が、歌ってくれよな」

掠れ声でも届いたのだろう、ステージの上で彼女はゆくり微笑んだ。それを見るとサガは全てがどうでも良くなつてしまった。何物にも代えがたい美しさは宝箱の中でネオンに隠れて静かに光っている。セイは懐から銃を取り出し、撃鉄を起こすとぴたりとセキの眉間に当たった。

「惜しい。惜しいなあ、セキ」

ひどく無感情な声だった。さよなら、光。いや、恕せ。

恍惚を湛えた表情でサガは満足そうに吠えた。

「セキじゃねえ。俺はサガだ。俺がそう決めたんだから絶対だ。あいつが呼んでくれたんだから絶対だ。もう誰

も彼も、俺を名前で縛ったり、」

パン。軽い音が脳内で響いて、それが最後の音だった。目を瞑る間もないままに目の前が真つ暗になった。

「ト」は真つ白な大地にぽつんと立っていた。そこには記録しか残っていなかった。シャボンに包まれた無数のそれらを、「ト」はゆっくり撫ぜるように丁寧に見て回った。見て回って気づいた。いつか自分も死ぬのだろう。

そうして本当の終わりが来るのだろう。その事実が嬉しくも少し寂しくもあった。とある地帯の記録の一つに歌があつた。シャボンに触れるとパチンとはじけて再生が始まる。これはなんだつたかなあ。どこか聞き覚えのある歌声なのだ。完璧なようでおぼつかない、不安定で不均衡な曲だった。「ト」の眼からは知らず涙がこぼれてい

た。格段称賛されなさそうなのその歌がどうしようもなく胸にしみるのだ。自分じゃない、しかし絶対的に自分である誰かが強烈に憧憬し愛したような。ありがとう。気が付くと言葉がふと口をついていた。ひどく優しい音色に揺られながら、「ト」はゆっくり目を閉じた。